

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02488

研究課題名(和文) 同僚性を介した保育者の専門性形成モデルの構築に関する研究

研究課題名(英文) Building a model of professional development for child care providers through collegiality

研究代表者

田中 浩司 (TANAKA, KOJI)

東京都立大学・人文科学研究科・准教授

研究者番号：50535036

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、協同的な活動についての保育実践事例の観察と、保育者へのインタビューを通して、保育者の専門性形成過程のモデル化を行うことを目的とした。保育園及び幼稚園での継続的な保育観察を通して、複数の協同的な活動についての実践事例を収集すると共に、保育カンファレンスや保育者へのインタビューを行うことで、保育者がどのように、協同的な活動の援助方略を身につけていくか、その過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では特に、幼児同士が共通の目的を持って取り組む「協同的な活動」に着目した。協同的な活動については、現行の指針・要領において、学びの基礎力として位置づけられる協同性を育む活動として位置づけられ、今日、広く保育現場に取り入れられている。こうした協同的な活動の形成過程を明らかにすると共に、協同的な活動を援助する保育者の専門性形成過程を明らかにした実践的意義は大きいと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to model the professional development of childcare providers through observation of childcare practices about cooperative activities and interviews with childcare providers.

Through continuous observation of childcare in preschool and kindergarten, several practices were collected. Furthermore, through childcare conferences and interviews with caregivers, the process by which caregivers acquire strategies for assisting cooperative activities was clarified.

研究分野：保育学

キーワード：協同的な活動 専門性 遊び 実践知

1. 研究開始当初の背景

保育者の専門性を「実践知」から捉えようとする研究が始まっている。教師の専門性を研究した久富(1994,2008)によれば、実践知とは、「個々の教師が生徒たちと接する中で見つけ出し学んできた、状況の中に埋め込まれた知識や技術であり、専門職としての教師たちのコミュニティの中に蓄積され、継承されてきたもの」とされる。本申請課題で対象とする保育者の実践知も、保育者コミュニティの中で蓄積、継承されるものと考えられるが、そうした実践知の獲得過程については、これまで充分明らかにされてはいなかった。

本研究では特に、幼児同士が共通の目的を持って取り組む「協同的な活動」に着目する。協同的な活動については、現行の指針・要領において、学びの基礎力として位置づけられる協同性を育む活動として位置づけられ、今日、広く保育現場に取り入れられている。こうした協同的な活動の形成過程を明らかにすると共に、協同的な活動を援助する保育者の専門性形成過程を明らかにすることができれば、その実践的意義は大きいと考えられる。

2. 研究の目的

まず、保育園・幼稚園それぞれにおいて継続的な保育観察を実施し、協同的な活動の実践事例を収集する。また、保育者が他の保育者と日常的に交わす会話や、保育実践を交流する保育カンファレンス場面の観察を通して、保育者の実践知の獲得過程を明らかにし、モデル化することを目的とする。

3. 研究の方法

研究1 協同的な活動は、子どもの興味・関心が組織的、集団的な活動として高まるところに実現するものであり、あらかじめ実践を予測することが出来ない。そこで20XX年4月～20XX+1年3月まで、幼稚園において継続的に保育観察を行い、協同的な活動のエピソードを抽出することとした。

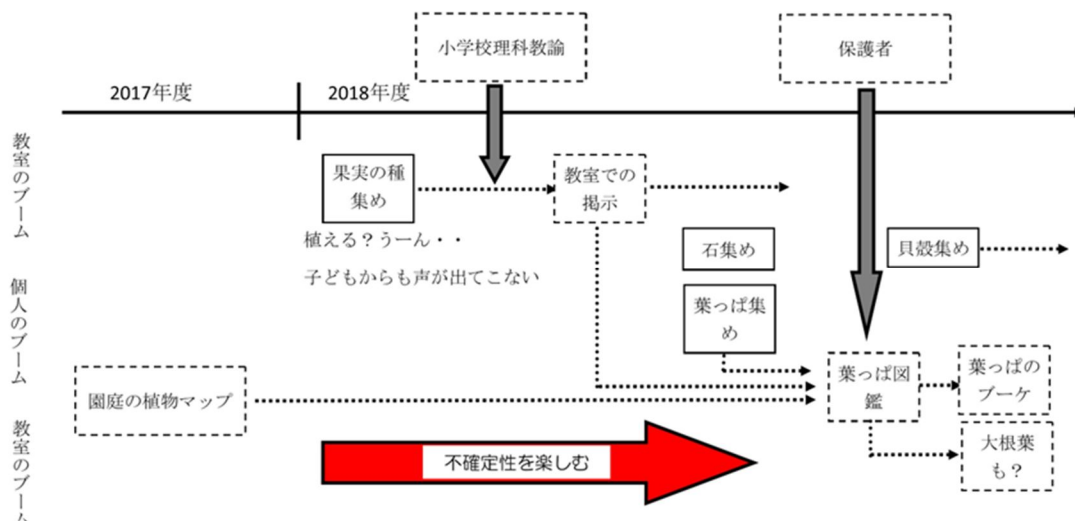
研究2 20XX年10月～20XX年3月までの6ヶ月間、保育園における継続的な保育観察と、実践をふり返る保育カンファレンスの観察を行った。

研究3 20XX年9月～20XX+2年3月までの1年7ヶ月間、保育園において継続的に保育観察を行い、協同的な活動のエピソードを収集した。

4. 研究成果

研究1 ここでは、20XX年10月頃から、子どもたちの間でブームになった「葉っぱを使った制作活動」に注目する。この活動は、年長クラスの女兒が登園時に見つけたという、沢山の葉っぱを仲間に見せたところからはじまる。多くの子どもが女兒の集めた葉っぱに注目するなか、保育者が葉っぱを台紙に貼り付ける方法を教えることがあった。集めた葉っぱの名前を調べ、図鑑のようにして楽しむ子どももいれば、貼り付けた作品そのものの美しさを楽しむ子どももあり、幅のある楽しみ方をしていった。

当該の実践は、女兒の興味からスタートしているようにも見えるが、インタビューを通して、それ以前からの活動との接続が明らかになった。前年度に保護者たちが配布した、園内の樹木マップがこの年にも利用されていた。当該年度のはじめ、子ども達が「果物の種を集める」ことに熱中することがあり、その際に小学校教諭から受けたアドバイス(種の保管方法や、掲示方法)が生かされていた。このように、協同的な活動の展開は予想できないものであり、なにが起きるか分からない「不確実性」を楽しむことが、協同的な活動において重要になることが示された。



研究2 本研究では、10月から11月にかけて行われた芋掘り（サツマイモ掘り）に関わる一連の協同的活動について、特に、芋掘りの準備段階（10月18日）でのクラス会議に焦点を当てて分析を行った。

その結果、グループ意識の希薄な子どもたちに、仲間と共通の目標を持って欲しいという保育者の意図と、なぜグループで1つの箱を作るのかという、子どもにとっての活動の目標を繰り返し確認する作業を通して、段ボールに色を塗るといった活動の計画が修正されていく様子を捉えることができた。

特に、本研究で対象とした4・5歳児クラスを担当していたA保育者は、これまで4・5歳児クラスの担当経験がなく、クラスでの活動をどのように進めていくのか手探りの状態であった。そうした中、B保育者に主任を加えたクラス会議での議論は、活動の意図を明確にするだけでなく、子どもたちの思いを大切にしたい援助のあり方を継承していく場となっていた。

研究3 本研究では、6月から継続的に取り入れられていた「マット取り」と呼ばれる遊びの実践を取り上げる。マット取りは、対面する2チームでマットを引き合い、自陣に持ち込んだマットの数が多きチームが勝ちとなる。ルール自体は単純なものであるが、子ども達は遊びの中でどのマットを取りに行くか、取った後には誰を助けるのかといった作戦会議を行いながら、遊びを進めていく。また、マットが少しでも自陣に入れば取ったことになるのか、全部取り込まないと取ったことにはならないのかといった、ルールそのものについての合意形成が行われることもある。

分析の結果、初めて年長クラスを担当したB保育者が、職員会議の中で、1人ひとりの遊びへの参加形態をとらえること、話し合いの目的を明確にすること、子ども自身に判断を委ねること、の大きさに気づく過程が見出された。

まとめ 本研究を通して、協同的な活動を援助する上で、保育者は実践の展開が見通せない「不確実性」を楽しみながらも、子ども自身が何をどうしたいのかということに気づくことが出来るよう、話し合いの意図を明確化させるといふ、多重の援助が必要となることが明らかとなった。こうした複合的な作業は、保育者個人で意識化することは難しく、実践を省察する保育カンファレンスのような場が欠かせないことも明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 田中浩司 飯野雄大	4. 巻 41
2. 論文標題 乳幼児教育における所属感 (Sense of Belonging) に関する文献的検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 心理科学	6. 最初と最後の頁 37-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20789/jraps.41.2_37	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 田中浩司	4. 巻 298号
2. 論文標題 保育者と研究者の協働と保育の実践知	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊保育問題研究	6. 最初と最後の頁 46-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中浩司	4. 巻 300号
2. 論文標題 丁寧な生活が伝えたい仲間をつくる	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊保育問題研究	6. 最初と最後の頁 58-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中浩司	4. 巻 515-5
2. 論文標題 幼稚園3歳児クラスにおける対立を楽しむ遊びの援助プロセス 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いたインタビュー・データの分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 77-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 田中浩司、飯野雄大、名倉一美、中塚良子、山本理絵
2. 発表標題 我が国の保育実践における所属感（Sense of Belonging）概念の適用可能性
3. 学会等名 日本保育学会 自主シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中浩司
2. 発表標題 遊びを援助する保育者の専門性形成に関する研究 年長クラスの「マット取り」を通して
3. 学会等名 日本保育学会 ポスター発表
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中浩司
2. 発表標題 協同的活動の計画過程における保育者の同僚性
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中浩司
2. 発表標題 ルール遊び研究における再現性
3. 学会等名 心理科学研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中浩司
2. 発表標題 保育の場で子どもの遊び心をはぐくむ - 集める遊びにおける遊び心
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会 第28回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中浩司
2. 発表標題 保育所1歳児クラスにおける所属意識の形成過程
3. 学会等名 日本発達心理学会 第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Koji Tanaka
2. 発表標題 Fostering a sense of belonging and community in Japanese day-care-center: Examination of practical knowledge among nursery teachers.
3. 学会等名 EECERA 2018 Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 田中浩司	4. 発行年 2020年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 262
3. 書名 たのしく学べる乳幼児のこころと発達 (分担執筆)	

1. 著者名 公益財団法人児童育成協会、清水 益治、森 俊之	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 11
3. 書名 子どもの理解と援助 第6講 集団における経験と育ち	

1. 著者名 公益財団法人児童育成協会、清水 益治、森 俊之	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 183
3. 書名 子どもの理解と援助	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------